

## 第3章 丸岡城の概要

### 3.1 丸岡城の歴史

#### 3.1.1 丸岡城の歴史

丸岡城は天正4（1576）年に柴田勝豊が現在地に城郭を築いたのが始まりとされている。柴田氏時代から今村氏時代の絵図は残されていないため、城郭がどのようなものであったか判然としていない。『古今類聚越前国誌』によると、丸岡城は「初め居館の類なりしが、重能に至て城池全く成る」とある。本多重能は丸岡藩2代藩主で、在任期間は正保2（1645）年から慶安4（1651）年のわずか6年間である。

「城池」というのは堀のことを指すのか、それとも縄張りや町割りまでを含むのかは解釈が分かれるところであろうが、城郭が完成したのは17世紀中頃と考えられ、整備の着手はそれ以前、丸岡藩初代藩主の本多成重のころから進められていたと考えるのが妥当だろう。丸岡城天守は現存12天守の一つで、近年実施された天守の総合調査の結果から、現在の天守は寛永期に整備されたものであると結論付けられた（註1）。丸岡藩の成立を契機として現在の天守が整備されたと考えことは理解に難くない。建築当時の天守について、屋根は柿葺きで3階の廻高欄は腰屋根、懸魚や破風は漆塗りで金箔押しの鯨を載せるという現在と異なる外観を持ち、床下には穴倉ともならない地下空間を持っていた。その後屋根が石瓦葺きになり、3階は廻高欄となって床下空間は埋められて柱が掘立柱になるという改修を受けている。なお、現在の天守台は、昭和23（1948）年の福井地震によって崩壊し、修復過程で積み直されたものである。昭和15～17（1940～1942）年の解体修理に際して撮影された写真を見ると、天守台の石垣は矢穴技法を用いず比較的加工の少ない石を野面積みにしていることから、倒壊前の石垣は慶長期まで遡ることも考えられ、寛永期以前に天守があった可能性が否定されたわけではない（註2）。

一方、城郭については、正保期に描かれた「正保城絵図」のうち、「越前国丸岡城之絵図（国立公文書館蔵）」と天保7（1836）年に描かれた「円陵輿地略図」とを比較しても、縄張りに大きな変化は認められない。本多氏の整備した縄張りが有馬氏の時代を通じて幕末まで維持されていたと考えて良い。

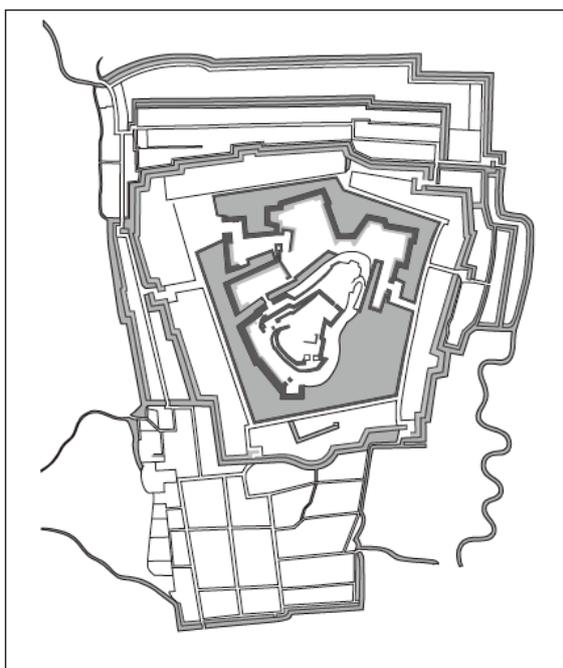


図3-1. 正保期絵図トレース図

【出典：『丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡』  
2021より】



図3-2. 天保期絵図トレース図

【出典：『丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡』  
2021より】

### 3. 1. 2 丸岡城廃城後の歴史

明治を迎えて、明治4（1871）年に丸岡藩は一旦丸岡県となった。その際、丸岡城は陸軍用地となっていたが、同5年に払い下げ入札が行われ、同6年の全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方（以下、「廃城令」）によって廃城となった。建物と土地は全て売却され、解体が困難であった天守のみが解体を免れ現存している。

明治9（1876）年以降内堀の西側から徐々に堀の埋め立てが始まり、大正10（1921）年頃までには西側半分が埋まり、さらに昭和初期までには内堀すべてが埋め立てられたようである（1993 玉置ほか）。

丸岡城天守は払い下げられ民有となった後、明治34（1901）年には丸岡町に寄付され、公会堂として活用されることとなった。この時に天守入口の階段は直線に改造されたとされる。明治12（1879）年から、天守の管理をするために羅漢山長昌庵（現羅漢山長昌寺）の僧が天守内にいて時報の太鼓を打っていたが、明治34年以降は本丸に堂宇を構え、時報は鐘を突くようになった。

昭和9（1934）年に国宝に指定された天守は、昭和15～17（1940～1942）年に大規模な解体修理を実施することとなった。天守台入口階段北側の石垣が解体され、中から自然石の階段が確認されたという記録がある。解体修理時に撮影された写真には城山北側の現在まで残る傾斜路が写っている。この傾斜路は江戸期の絵図に見られないことから、明治以降昭和初期までに整備されたことがわかる。この登り道は「おんなざか」、城山西側に設けられた登り道は「おとござか」と地元では俗称されていたようである。

昭和23（1948）年に福井地震が発生し天守は倒壊した。城山もダメージを負ったと思われるが、被害状況は明らかではない。天守の修理にあたって、天守台は内部に鉄筋コンクリート製基礎が埋め込まれ、石垣は在来工法ではない工法で積み上げられている。また、松の丸東寄りに直径8m、深さ4mの防火水槽が設置された。この水槽は不明門があった辺りに設置されたと推定される。本丸にあった長昌庵の建物も地震で倒壊し、同じ場所には再建されず城山下の現在地に移った。昭和23（1948）年に発生した福井地震の直後に米軍が撮影した航空写真によると、北東の東の丸の畑の形状に曲輪の名残を見ることができ。また、隠居曲輪にあたる場所は、維新後に丸岡県が置かれた際の県庁があり、のちにも公的機関が立地したことから耕作地としての開発が免れた。そのことにより、現在も隠居曲輪にあたる場所に一段高い地形が残っている。

昭和25（1950）年に文化財保護法が施行され、天守は重要文化財指定となった。そして、天守の修復が完了した昭和30（1955）年、丸岡城は都市公園「霞ヶ城公園」となった。最初は城山だけであったが、昭和52（1977）年に城山の東側に公園が追加され、日本庭園や資料館、社会福祉施設が整備された。さらに平成16（2004）年には都市公園の区域変更がなされ、現在5.33haが都市公園区域に登録されている。平成18（2006）年、国土交通省実施の「日本の歴史公園100選」に選ばれた。

城山北側の北面から東面にかけては石積み護岸が施工され、西面にかけては裾部に護岸工事がされた。東面中ほどにはつづら折りの階段が設けられ、南には裾の護岸と中腹に園路が整備された。園路より上には約1.2mの擁壁があり、その上に残った石垣が露頭することになった。この園路は南西側を回って「おとござか」付近まで達している。西側の腰曲輪を開削して連絡道路が設けられた。道路は豊原門があった場所を通過して埋門跡の北側につながっている。埋門跡の北側には八幡神社が置かれ、南側には管理事務所が建てられた。管理事務所は段差を利用して建てられ、2階部分は本丸とつながっている。本丸は現在、砂利敷きとなっており、東の端にお静供養碑とされる多層塔残欠がある。

なお、城山が公園として利用されることになったきっかけは定かではないが、昭和初期に地元有志が城山に桜を植え始め、公園として利用されていたと考えられる。桜は最盛期に400本のソメイヨシノが

植えられ、平成 18（2006）に「日本さくら名所 100 選」に選ばれた。また、城山には忠魂碑をはじめ多種多様な石碑類が建てられている。

表 3-1. 丸岡城廃城後の主な歴史年表

年	摘要
明治 4（1871）年	丸岡城天守 民間に払い下げ
明治 9（1876）年	内堀の西側から徐々に堀の埋め立てが始まる
明治 12（1879）年	羅漢山長昌庵の僧が住み時報の太鼓を打つようになる
明治 34（1901）年	丸岡城天守 旧丸岡町に寄付 丸岡公会堂として活用
昭和 9（1934）年	丸岡城天守 国宝に指定（国宝保存法による）
昭和 15～17（1940～1442）年	丸岡城天守 大規模な解体修理実施
昭和 23（1948）年	福井地震により天守倒壊
昭和 25（1950）年	丸岡城天守 重要文化財に指定（文化財保護法による）
昭和 30（1955）年	丸岡城天守修理工事 竣工 都市公園「霞ヶ城公園」として登録(1.50ha)
昭和 52（1977）年	都市公園区域変更（2.11ha） 日本庭園や資料館、社会福祉施設を整備
昭和 54（1979）年	霞ヶ城公園の整備完了 丸岡城築城 400 年記念祭開催
平成 2（1990）年	霞ヶ城公園「日本さくら名所 100 選」に認定
平成 16（2004）年	都市公園区域変更(5.33ha)
平成 18（2006）年	霞ヶ城公園「日本の歴史公園 100 選」に選定

註 1 吉田純一氏は、さらに現天守の建立年代を寛永 5 年としている。（2020・吉田）

註 2 中井均氏は「天守台は少なくとも慶長 5 年（1600）以前に築かれたとみておかしくない」としている。（2019 坂井市教委）

#### 参考文献

- 2020 吉田純一「丸岡城天守の建築年代～天守 1 階東西中央列「に二」柱の墨書の検討～」  
『FUT 福井城郭研究所年報・研究紀要 2019』
- 1993 玉置伸悟 長谷川洋 土井睦浩 「明治期における丸岡城下町の都市構造の変容」  
『日本建築学会北陸支部研究報告集』第 36 号 1993 年 7 月
- 2017 富原通晴/ 富原文庫「富原文庫蔵陸軍省城絵図- 明治五年の全国城郭存廃調査記録-」
- 2019 坂井市教育委員会「丸岡城天守学術調査報告書」
- 2020 坂井市教育委員会「丸岡城学術調査資料集 第 1 集」
- 2021 坂井市教育委員会「丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡」

## 3. 2 丸岡城の構造

### 3. 2. 1 縄張り

丸岡城の縄張りの様子がわかる最も古い絵図は『円陵略図』である。後世の写図であるが、「慶長十八癸丑年本多飛弾（驒） 守治部大夫成重御引移之節図」との添書きがあつて本多成重が入城した時、すなわち慶長 18（1613）年当時の丸岡城と城下の様子を描いている。縄張りは小高い丘上に本丸を置き、その北半裾に二の丸を設け、これらをほぼ五角形の内堀が取り巻き、内堀の外側に三の丸を巡らし、さらに外側に 2 重、3 重の外堀が巡らされている。こうした縄張りの様相は『正保城絵図』のうち、『越前国丸岡城之絵図』（以下、『正保丸岡城絵図』と略称する。）などの絵図でもほぼ同じである。そして『正保丸岡城絵図』には、南西から北西に向かって細長く伸びる小高い丘上全体を本丸と記し、丘裾の曲輪を二の丸、内堀の外周を廻る環状の曲輪を三の丸としている。

『正保丸岡城絵図』では南西から北東に緩やかに傾斜する丘の上全域を本丸と記している。しかし、券売所兼事務所付近にある石垣と門によって本丸は南北に分かれ、『丸岡城地之図』（福井県立歴史博物館）では天守がある南西側を本丸、北東側の一段低くなった区画を「松の丸」と記し、『越前丸岡城図（池田家文庫）』などは南西側を「本城」、北東側を「二之丸」と呼んでいる。同じ丘上でも北東部は一段低く、いわば附壇のような性格を有していることが、呼び分ける要因になったのであろう。

二の丸は丘裾の西から北、東にかけて配され、『正保丸岡城絵図』ではこれら全域を「二の丸」と記している。形状からみると、役所や御殿がある中央部とその西につながる区画、およびそこから東につながる区画に大別できる。中央の区画には御殿が描かれ、この区画が二の丸の中核部であったことは明らかである。西の区画は『越前丸岡城図（松平文庫）』や『同（池田家文庫）』などに「隠居郭」あるいは「隠居曲輪ト云」とある。一方、中央部から東につながる区画は『越前丸岡城図（池田家文庫）』などに「東之（ノ）丸」とあり、『正保丸岡城絵図』にはここにも御殿が描かれている。曲輪名ではなく、「花畑」と記している絵図もある。

中央部の二の丸から西北方にも広い区画がある。『正保丸岡城絵図』ではここに「追手門」があり、この一画が丸岡城の表正面すなわち大手口であったことがわかる。一方、この反対側、つまり「東の丸」のさらに東に続く一画は裏門があり搦手口に当たる。この他、丘の下端部の南側から西側にかけて湾曲した帯状の平坦地がみられる。堂形に類する曲輪であるが、この一画の土蔵は「水の手土蔵」とある。ただし、上述した区画の呼称はどの絵図にもみられない。

内堀の外周を環状に取り巻く三の丸は各絵図でも三の丸とあり、江戸時代を通して武家屋敷地であった。

なお、『正保丸岡城図』だけでなく、ほぼすべての絵図に南側の三の丸の一画に L 字型（コの字型）の堀がみられる。この堀は絵図などから確認される縄張りとの関連性はほとんどどうかはえず、形状からみると出柵に伴う堀の名残とも推察できる。さらにその南側に廻る外堀には円弧状の部分がみられ、これは旧馬出の堀を取り込んだものとみることができ、これらは絵図などにみられる縄張りより一段階古い縄張りに関連する遺構とも想定できる。現段階で裏付け、確認はできないが、あるいは古くは南側に出柵型と馬出を備えた出入りを構える縄張りが存在していた可能性を推察できる。

（『丸岡城天守学術調査報告書』より転載）

### 3. 2. 2 丸岡城内の諸建物

本丸にある天守は二重三階建て独立式望楼型に分類され、通し柱はなく1階が2階3階を支える構造となっている。屋根は石製本瓦葺で北庄城も同じく石瓦葺であったとされるが、現存例は本例のみである。総合調査によって、屋根は創建当初は柿葺きであったが、石製本瓦葺に改められたことがわかっている。また屋根瓦は当初足羽山から産出する笏谷石(緑色凝灰岩)で製作されていたものが使われていたことがわかっている。

天守台は自然石をあまり加工せずに積んだ野面積みで、隅は算木積み、高さは6.2mである。平面形はやや不整形で、木造部分と一致していないため、裾部の雨仕舞として水切屋根を設けている。

(『重要文化財 丸岡城天守 保存活用計画』より転載)

藩政期の丸岡城に関する絵図の中で、門や櫓などの名称を記している例は『円陵略図』の「天守」や『正保丸岡城絵図』の「追手門」、「埋門」などに限られている。櫓や城門などの名称がわかるのは明治7(1874)年改正の『丸岡城図(白道寺蔵)』である。

これらの絵図と丸岡城の諸建物が明治5(1872)年に競売にかけられた際の記録『元丸岡城郭御拂下入札人名帳 足羽県』(註1)を対照すると、櫓について、二の丸(隠居曲輪)の西隅と南隅には西櫓と南櫓があり、二の丸北側の石垣上には庭先櫓と北櫓があった。また花畑とも呼ばれた東の丸の北側には花畑櫓があり、東の丸のさらに東にあった搦手口の最南端の丘裾には山下櫓があった。なお、天保9(1838)年の『丸岡領内に付巡見使への応答心得』(註2)から、天保期には城内に天守を含めて櫓は8棟あったが、1棟は不詳である。

城門は不明門から西門まで5棟あった。不明門は本丸から続く北東の区画すなわち松の丸の東端ほぼ中央にあった2階建ての櫓門である。市内の個人宅(丸岡町内)に移築されたが、昭和23(1948)年の福井地震で破損し、現在は2階部分が撤去された平屋建ての門に変わっている。豊原門は同じ松の丸の西側にあり、松の丸の正門として西側の崖面に沿った坂道を登り詰めたところにあった。石橋門は、隠居曲輪から空堀に架かる石橋を渡ったところにあった門で、本丸への登城ルート第一門にあたる。東門と西門は丘裾の中央部の二の丸にあった門で、前者は東側の搦め手口にあった門、後者は西北の大手口から入った二の丸の出入り口の門である。その他、大手口には追手門、本丸・松の丸境には埋門があった。

(『丸岡城天守学術調査報告書』より転載)

註1 『元丸岡城郭御拂下入札人名帳 足羽県』(福井大学高嶋文庫所蔵)、表紙に年代などの付記はないが、「足羽県」とある。足羽県が存在したのは明治3年12月から明治5年1月であり、この入札帳はその間の明治4年とみるのが妥当である。

註2 齊藤与次兵衛家文書



図 3-3. 丸岡城の曲輪と建物  
 【出典：『丸岡城天守学術調査報告書』2019 より】

### 3. 3 丸岡城跡の各種調査成果

#### 3. 3. 1 発掘調査

##### (ア) 発掘調査の経過

平成 21 (2009) 年度以降、主に工事に先立ち、遺構の有無を確認する調査を行っており、平成 27 (2015) 年度以降は遺跡の内容確認を目的として調査を継続している。また、平成 28 (2016) 年度以降は、丸岡城天守の調査研究事業の開始に伴い丸岡城調査研究委員会の指導を受けながら調査を実施した。調査機関と調査理由、調査場所を整理すると以下のとおりである。

表 3-2. 丸岡城発掘調査の履歴

年度	調査機関	調査理由	調査場所
平成 21	平成 21 (2009) 年 12 月 8 日～ 平成 21 (2009) 年 12 月 25 日	丸岡城天守消防設備改修工事に伴う 試掘調査	天守西側イヌバシリ
平成 22	平成 23 (2011) 年 1 月 12 日～ 平成 23 (2011) 年 1 月 20 日	丸岡城天守消防設備改修工事に伴う 試掘調査	本丸西側内堀西端
平成 23	平成 24 (2012) 年 2 月 6 日～ 平成 24 (2012) 年 3 月 2 日	丸岡城天守消防設備改修工事に伴う 試掘調査	本丸北東、 南側イヌバシリ
平成 24	平成 25 (2013) 年 1 月 28 日～ 平成 25 (2013) 年 2 月 22 日	丸岡城天守消防設備改修工事に伴う 試掘調査	天守台南側、 天守階段下
平成 25	平成 26 (2014) 年 2 月 24 日～ 平成 26 (2014) 年 3 月 5 日	本丸城山の石垣残存状況確認調査 石垣内容確認試掘調査	本丸西側斜面
平成 26	平成 26 (2014) 年 6 月 17 日～ 平成 26 (2014) 年 8 月 8 日	城山地形測量 建物建設計画に伴う試掘調査	二の丸・隠居曲輪石垣
平成 27	平成 27 (2015) 年 6 月 15 日～ 平成 27 (2015) 年 7 月 28 日	遺跡内容確認調査	本丸・伝建物跡
平成 28	平成 28 (2016) 年 10 月 17 日～ 平成 28 (2016) 年 12 月 2 日	遺跡内容確認調査	本丸・伝建物跡
平成 29	平成 29 (2017) 年 10 月 23 日～ 平成 29 (2017) 年 12 月 4 日	遺跡内容確認調査	本丸・伝建物跡、 天守台北東角
平成 30	平成 30 (2018) 年 10 月 29 日～ 平成 30 (2018) 年 12 月 10 日	遺跡内容確認調査	本丸・伝建物跡、 天守台北及び南
令和元	令和元 (2019) 年 7 月 1 日～ 令和元 (2019) 年 7 月 30 日	遺跡内容確認調査	本丸、天守台南側

##### (イ) 発掘調査の成果

###### (1) 隠居曲輪及び内堀について

本丸のある城山周辺は市街化が進んでいる。調査することができたのは内堀西端の一部、隠居曲輪の北西角から北側石垣の一部である。いずれの調査区においても石垣を検出している。内堀で検出した石垣は三の丸側にあたり、他の城郭では本丸側に比べて低い石垣を積むのが一般的で、丸岡城においても同様に内堀の三の丸側は 1.2m 程度の高さに積まれ、石積に残った痕跡から堀の水深は約 50 cm 程度であったと推定され、出土位置も絵図と合致する。隠居曲輪については明治以降も公共用地として利用されていたため、内堀西端の

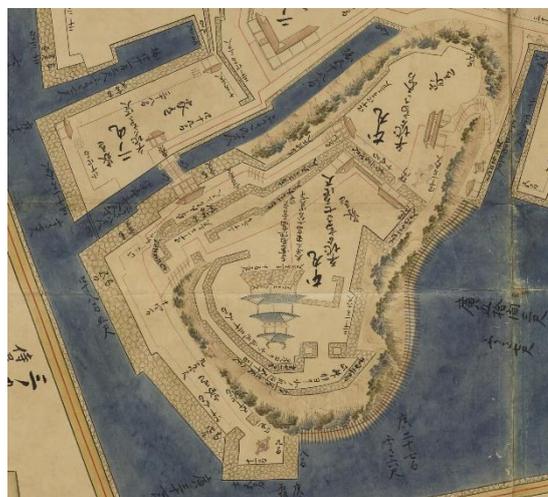


図 3-4. 『正保城絵図』のうち『越前国丸岡城之絵図』  
(国立公文書館蔵)

【出典：『重要文化財 丸岡城天守 保存活用計画』  
2024 より】

石垣は道路計画と建物建設による影響を免れていた。明治以降も露出していた石垣は積み直し修理が適宜実施されていたが、地中に埋まった状態の石垣は絵図と合致することから、江戸期から明治期まで隠居曲輪の縄張り形状が維持されていたことが分かった。

## (2) 本丸の建物跡について

本丸は『正保城絵図』のうち、『越前国丸岡城之絵図（国立公文書館蔵）』のほか、明治期に描かれた『越前国坂井郡丸岡霞之城（霞城之図）（霞城之影掲載）』でも本丸以外に建物があったことが表現されている。遺構面は現在の砂利整地層の直下に残っている。ただし近代以降の各種工事等によって大きく攪乱を受けている。調査によって複数のピット・土坑を検出し、溝状の石積み遺構も検出している。ピット群については江戸時代まで遡るものも含め、明治時代に建てられた長昌庵の建物や近代以降の公園整備に伴う建造物の痕跡も含まれると考えてよい。図 3-5 に示すピット、土坑は概ね傾いており、その傾きが溝状の石積み遺構と平行もしくは直交に近い関係にあることから、これらは本丸に所在した一連の建造物と考えられる。本丸に所在した建造物は絵図によって「御殿」、「家」、「番代所」などと表記されており、規模のわかる図面は現在のところ確認されていない。



図 3-5. 本丸調査地遺構配置図  
【出典：『丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡』2021 より】

本丸で出土している遺物をみると、土師器は灯明皿が多く、陶磁器は伊万里や唐津といった肥前系の 17 世紀代の遺物が出土している。遺物の年代は 16 世紀後半から 17 世紀代と、城郭が整備された時期に集中している。碗や播鉢、甕といった生活雑器が出土していることから、人が常駐するような施設であったと考えられる。丸岡藩は元禄 8（1695）年に藩主が本多家から有馬家に代わっている。出土遺物が 17 世紀代までにまとまっているのは、有馬家入封以降に本丸の利用形態が変化した可能性がある。

## (3) 天守台について

天守台北東角の調査によって天守台が岩盤の凝灰岩に掘方を作り、根石を据えていることが確認できた。なお、天守台北側は福井地震とその修復の過程で岩盤層直上まで攪乱を受けたと考えられ、天守台石垣もその際に積み直された可能性が高く、北トレンチで確認された岩盤層に直接根石を据える技法は本来の石垣構築時のものではない可能性を考慮したい。

一方で南面では新たな石垣を検出している。「円陵略」では南面に小さな石垣が描かれ、天守台平面形は現

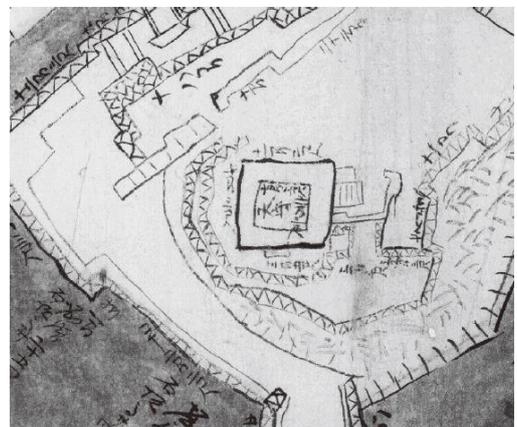


図 3-6. 丸岡城略図（「円陵略」）  
【出典：『丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡』2021 より】

在のものと異なる。昭和 15（1940）年ごろに撮影された写真では南面に張り出した石垣が写っている。昭和 15～17（1940～1942）年に作成された実測図によると、石垣の規模は東西 5 m、南北 1.2 m、高さ 2 m である。これは平成 29（2017）年度調査トレンチで検出した第 1 石列の位置と合致する。よって、第 1 石列は本来石垣で、天守台構築当初からではなく、後補によるものと考えられる。さらに、平成 29 年度調査で検出した第 2 石列及び令和元（2019）年度調査で検出した石垣は天守台南面から南に 3.5 m、幅 8 m 以上で、こちらは天守台の石垣と噛み合っていることから天守台構築当初まで遡ると考えて良い。現在の天守の木造部分については寛永期のものであるが、天守台については慶長期以前まで遡る可能性が指摘されている（坂井市 2019）。今回検出した石垣が天守台構築当初のものであるならば、当初の天守は現在のものとは異なる平面形状をしていたことになる。つまり、検出された石垣は現在のところ明らかになっていない現存天守以前の天守の姿を推定する材料になるのである。

また、この石垣の南側に直径約 60 cm の礎石が等間隔に 5 か所以上並んでいることが確認された。礎石の大きさから考えて、大規模な建物があった可能性があるが、出土遺物や遺構の位置から、石垣と礎石には時期差が想定できる。

#### （4）遺物について

発掘調査で出土した遺物のほとんどが石瓦である。笏谷石製瓦を葺いた建物で現存しているのは丸岡城天守、正覚寺山門（註 1）、丹巖洞、高野山の松平秀康及び同母霊屋（註 2）がある。出土例をみると、北庄城、越前府中城、東郷榎山城、楞巖寺、金沢城北ノ丸がある。丸岡城天守は江戸時代を通じて修理をしながら、笏谷石製本瓦葺きを維持してきた貴重な事例である。

丸岡城天守の石瓦導入は、金沢城北ノ丸（御宮）と近い寛永 20（1643）頃と推定している（坂井市 2019）。江戸期の屋根修理歴は、享保 2（1717）年・三層屋根、明和 2（1765）年・初重屋根葺き替え工事、文化 9（1812）年・三層屋根外壁全て修理、嘉永 6（1853）年・初層屋根及び外壁修理で、昭和 15～17（1940～1942）年の修理工事で大幅に石材が滝ヶ原石製に変更された。

また、天守に使われていた石瓦以外に、棟瓦が出土している。福井城跡でも確認できる板塀などの棟石と思われるものと、高野山の松平秀康霊屋の屋根の降り棟に類似例が確認できる。こうした出土例から、天守以外の建物についても整備されていたことがうかがえる。



図 3-7. 出土した棟瓦  
【出典：『丸岡城発掘調査報告書  
丸岡城跡』2021 より】

註 1 福井県越前市所在。越前府中城から移築されたとされる。

註 2 霊廟建築で柱や壁まで笏谷石を使用している。

#### 参考文献

- 2009 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 『福井城跡-北陸新幹線福井駅部建設事業に伴う発掘調査-』  
福井県埋蔵文化財調査報告第 109 集
- 2016 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 『越前焼総合調査事業報告書』「福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 6」
- 2014 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 『福井城跡-JR 北陸線外 2 線連続立体交差事業に伴う調査-』福井県埋蔵文化財調査報告第 146 集
- 2017 富原道晴 『富原文庫蔵 陸軍省城絵図-明治五年の全国城郭存廃調査記録』

- 2019 中原義史 「福井城跡の土師器皿-16世紀末～17世紀-」『平成30年度環日本海文化交流研究集会 北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相- 城下町とその周辺遺跡の土師器皿(かわらけ)を中心に-』公益財団法人石川県埋蔵文化財調査センター
- 2019 石川県金沢城調査研究所 『金沢城跡- 本丸附段・北ノ丸-』金沢城史料叢書 35 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 12
- 2002 乗岡実 『岡山城三之丸曲輪跡 表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会
- 2019 坂井市教育委員会 『丸岡城天守学術調査報告書』
- 2020 坂井市教育委員会 『丸岡城学術調査資料集第1集- 昭和15～17年修理工事関係資料-』
- 2021 坂井市教育委員会 『丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡』
- 2019 国京克巳 『越前丸岡城の門遺構調査報告書』
- 2019 吉田純一 『丸岡城～ここまでわかった！お天守の新しい知見と謎～』坂井市文化課丸岡城国宝化推進室

### 3. 3. 2 石垣調査

#### (ア) 丸山城城山の石垣分布調査

現在の城郭としての丸岡城は、天守のある城山を残して、内堀は全て埋め立てられている。城山についても明治以降様々な改変が重ねられ、江戸時代の縄張りがどれほど残っているか、判然としない。そこで、令和3(2021)年3月に刊行した『丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡』の中で、丸岡城城山に残されている石垣の分布状況を整理し、描かれた時期が追える絵図や明治初期に撮影された古写真等を踏まえて石垣残存状況の確認を行った。その結果が図3-8である。

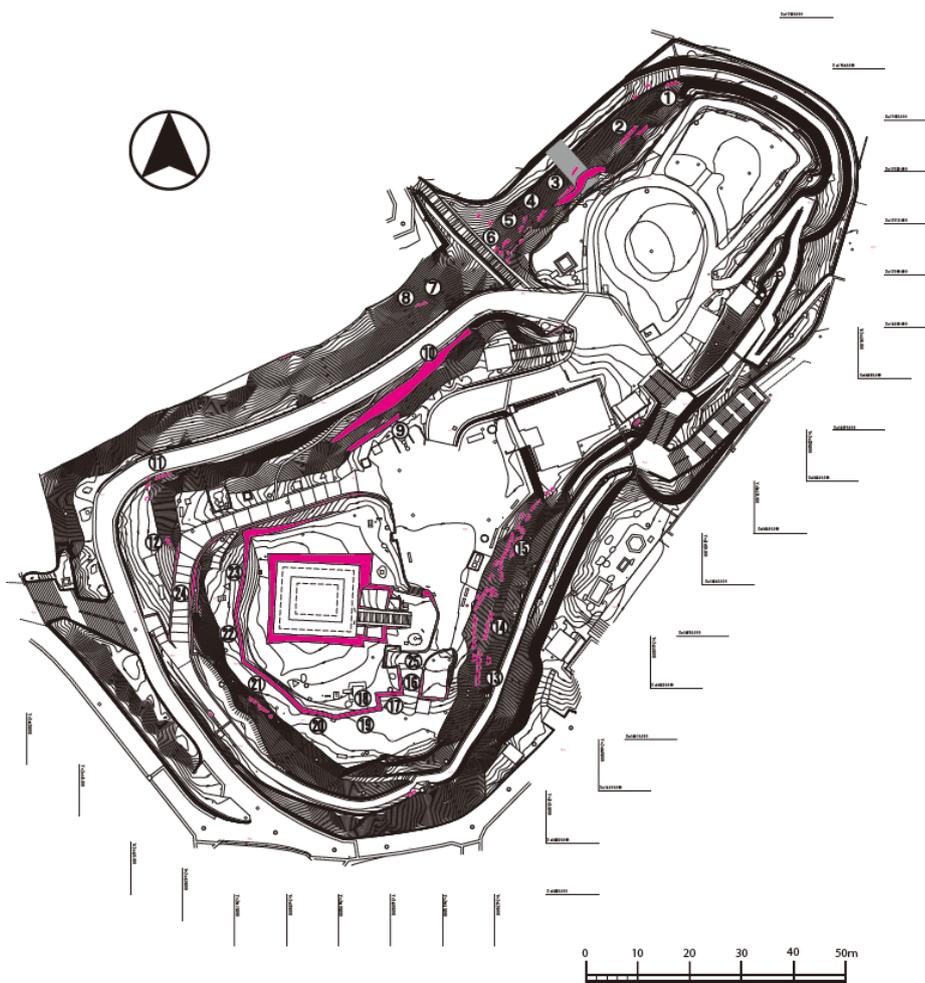


図3-8. 石垣分布図

【出典：『丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡』2021 より】

松の丸北西斜面は石垣がまとまって確認された（石垣①～⑥）。最大 60cm 程度までで、加工の程度が少ない石を積んでいる。連続性があると考えられ、江戸期まで遡る可能性が高い。本丸北下段は、石は散見されるが積まれたものは確認できていない（石垣⑦、⑧）。本丸北側上段は、上下二段の石垣が残っている（石垣⑨、⑩）。下段は幅 33.8m、高さ 5 m で、上段は幅 12.1m、高さ 2.4m の範囲で残っている。下段の石垣には宝篋印塔の転用や、間詰石に石瓦が使われているなど、近代以降に積みなおされた可能性もある。さらに西では斜面裾に自然石が並んでいる（石垣⑪）。水の手から本丸につながる階段石垣の外側に石垣が残っている（石垣⑫）。平成 25（2013）年度の調査で周辺を調査したところ、裏込めの広がりを確認している。

本丸南側の上段、イヌバシリの崖側斜面は石が散見されるが積まれたものは確認できない。本丸南側下段は石が散見されるが積まれたもの、並べられたものは確認できない。本丸東側上段斜面は木の根に絡む石垣が確認できる（石垣⑬）。広範囲にわたって石が散見され、一部は連続性が想定できる（石垣⑭、⑮）。いくつかの石は原位置を留めている可能性を考慮したい。

このほか、イヌバシリの石垣はいずれの絵図でも確認できる。地震による積み直しの可能性はあるものの、平面形は踏襲していると思われる（石垣⑯～㉓、㉕）。

#### （イ）丸岡城天守台石垣の石材調査

丸岡城天守台の石垣は、福井地震により完全に倒壊した。その後、積みなおしが行われ現在に至っている。石垣の積み方は、自然石による野面積みで、一部凝灰岩類の加工石を使用している。修復は倒壊以前の資料を基に積みなおしが行われた（註 1）。その石材は、丸岡東部の加越山地から産出する岩質と同質である。石垣の石材は新たに採集することなく、ほとんど元の石材を再利用して行われたものと考えられる。

平成 31（2019）年 3 月に刊行した『丸岡城天守学術調査報告書』の中で、天守台石垣の石材の岩質について調査を実施した。その調査結果の概要を下記にまとめる。

天守台の石垣を構成する石材の主な岩質は、デイサイト、安山岩、流紋岩、デイサイト質凝灰角礫岩、安山岩質凝灰角礫岩、ラピリストーン、デイサイト質火山礫凝灰岩などである。

石垣石材の自然石は、丸岡東部の加越山地に分布する火山岩や火砕岩が源である。この加越山地の地質を詳細に調査した結果、運搬の労力、距離等を考慮すると、丸岡城に最も近く、歴史の繋がりから豊原から運搬されてきたものと考えられる。現在の豊原を調査してみると、石垣や礎石が残されており、石材の岩質、大きさ、風化や摩耗の程度など、丸岡城天守台の石垣を構成する石材によく似ている。このことから、当時存在した豊原寺跡の石垣の石材を再利用した可能性がある。

天守台石垣の隅角部をはじめとする各所で使用されている凝灰岩類の加工石材は、柵石と呼ばれる柵集落の南方にある丘陵地から採掘される凝灰岩類である。柵石は凝灰岩類の中のラピリストーンに分類される火砕岩で、天守台石垣の石材の岩質と一致した。

この他、丸岡城の石垣石材の加工石材の産地の候補として、柵周辺にある後山石、坪江石、熊坂石、権世石などがある（註 2）が、何れも柵石に類似していて肉眼では区別が困難であった。

註 1 重要文化財丸岡城天守修理委員会、1955、『重要文化財 丸岡城天守修理工事報告書』

註 2 剣岳村誌編集部、1955、『剣岳村誌 第 6 章地下資源』、剣岳村

#### 参考文献

2019 坂井市教育委員会 『丸岡城天守学術調査報告書』

2021 坂井市教育委員会 『丸岡城発掘調査報告書 丸岡城跡』



### 3. 3. 3 文献調査

平成 31 (2019) 年に刊行した『丸岡城天守学術調査報告書』のなかで、絵図をはじめとする文献調査を行った。その結果、丸岡城の縄張りや各郭の呼称、丸岡城内の諸建物やその名称が明らかとなった。その調査成果は「3. 2 丸岡城の構造」でとりまとめている。ここでは、調査結果を表にまとめたものを掲載する。

表 3-3. 丸岡城絵図にみられる曲輪の呼称 【出典：『丸岡城天守学術調査報告書』2019 より】

番号	絵図名	本丸（丘の上）		二の丸（丘の裾）			その他		三の丸 内堀の外回り
		曲輪① (南の一画)	曲輪② (北の一画)	曲輪③ (西の一画)	曲輪④ (中央部)	曲輪⑤ (東の一画)	大手	搦手 (裏門)	
城郭 城下 図	1 円陵略図（慶長 18 年） （丸岡歴史民俗資料館所蔵）	・	・	・	・	・	・	・	・
	2 丸岡本城内外郭街中惣車輪一分 二間ノ絵図 （福井県立歴史博物館所蔵）	・	・	・	・	・	・	・	・
	3 越前国丸岡城之絵図 （正保城絵図） （国立公文書館所蔵）	本丸	本丸	二ノ丸	二ノ丸	二ノ丸	（追手門）	・	三ノ丸
	4 円陵奥地略図 （天保 7 年書写） （遠藤平助氏所蔵）	・	・	・	・	・	・	・	・
	4' 当円藩之大略図 （牧田正太郎氏所蔵）	・	・	・	・	・	・	・	・
	5 丸岡城下絵図 （文化 15 年以前） （戸田徹氏所蔵）	本丸	（不明門）	（武具屋）	貳ノ丸	（藪）	・	・	・
	6 丸岡城図（弘化 4 年） （松枝信善氏所蔵）	本丸	・	・	二ノ丸	（花畑）	・	・	・
7 丸岡城図（明治 7 年） （白道寺所蔵）	旧本丸	（旧不明門地）	（旧武具屋）	（旧住居向併果庁跡）	（旧花畑）	・	・		
年代 不詳 図	8 丸岡城地之図 （福井県立歴史博物館所蔵）	本丸	松ノ丸	・・・	二ノ丸	（花畑）	・	・	
	9 越前丸岡城絵図 （224 本別 20-1・00-001） （国立国会図書館所蔵）	本丸	・	・	二ノ丸	・	・	・	
	10 越前丸岡城絵図 （松平文庫、 福井県立図書館保管）	本城	・	隠居郭	・	東ノ丸	・	・	
	11 越前丸岡城図 （池田家文庫 岡山大学図書館所管）	本城	二ノ丸	隠居曲輪ト云	・	東ノ丸ト云	・	・	
	12 越前丸岡城図 （公益財団法人三康文化研究所 附属三康図書館所蔵）	本城	二ノ丸	隠居曲輪ト云	・	東ノ丸ト云	・	・	
	13 越前丸岡城絵図 （225 本別 20-1・00-001） （国立国会図書館所蔵）	本丸	・	・	・	・	・	・	
	14 越前丸岡之城図 （松江歴史館所蔵）	本丸	・	・	・	・	・	・	

表 3-4. 丸岡城絵図にみられる各曲輪の建物 【出典：『丸岡城天守学術調査報告書』2019 より】

番号	絵図名	本丸（丘の上）		二之丸（丘の裾）			その他		
		曲輪 （南の一画）	曲輪 （北の一画）	曲輪 （西の一画）	曲輪 （中央部）	曲輪 （東の一画）	大手	搦手 （裏門）	水の手他
城郭城下図	1 円陵略図 （慶長18年） （丸岡歴史民俗資料館所蔵）	「天守」	二重門 （?）、門	櫓、櫓、門	櫓、櫓	・	門、門	門、門、 櫓	・
	2 丸岡本城内外郭街中惣車輪一分二間ノ絵図 （福井県立歴史博物館所蔵）	「天守」	櫓門、門	櫓、櫓、門	櫓、櫓	・	門、門	門、門、 櫓	・
	3 越前国丸岡城之絵図（正保城絵図） （国立公文書館所蔵）	天守 （3重）、門、 家有	櫓門、門、 家有	櫓、櫓、門、 家有	櫓、櫓、 御殿	御殿、櫓	門、門	門、門、 櫓	土蔵、 家有
	4 円陵輿地略図（天保7年書写） （遠藤平助氏所蔵）	天守 （3重）、門、 櫓	櫓門、門	櫓、櫓、門	櫓、櫓	・	門、櫓門	門、門、 櫓	・
	4' 当円藩之大略図 （牧田正太郎氏所蔵）	天守 （3重）、門、 櫓	櫓門、門	櫓、櫓、門	櫓、櫓	・	門、櫓門	門、門、 櫓	・
	5 丸岡城下絵図 （文化15年以前）（戸田徹氏所蔵）	「天守」、門、 建物	不明門、門	櫓、櫓、門	櫓、櫓、門、 長屋	櫓	門、中門	門、門、 櫓	・
	6 （丸岡城図）（弘化4年） （松枝信善氏所蔵）	天守台、御 殿、門	櫓門、門、 土蔵	櫓、櫓	御居間、 櫓、櫓	櫓	門、櫓門	門、門、 櫓	土蔵
7 （丸岡城図）（明治7年） （白道寺所蔵）	天守	不明門、 豊原門、 本丸土蔵 （旧土蔵）	西櫓（櫓）、 南櫓、 石橋門	元県庁、同 統建物、長 屋、庭先 櫓、北櫓、 西門、	花畑櫓	・	東門、裏 門、山下 （櫓）	水ノ手土 蔵、物置、 鐘楼	
年代不詳図	8 丸岡城地之図 （福井県立歴史博物館所蔵）	「天守」、 太鼓番所、 口代所	二重門、門	櫓、櫓、門	御住居、 櫓、櫓	櫓	大手、 番所、 口櫓門	二重門、 裏門、櫓	蔵
	9 越前丸岡城絵図 （224 本別 20-1・00-001） （国立国会図書館所蔵）	天守、門	櫓門、門	櫓	櫓、櫓	・	門、門	門	井戸郭
	10 越前丸岡城絵図 （松平文庫、福井県立図書館保管）	天守 （3重）、門、 御殿	櫓門、櫓門、 門	櫓、櫓、門	御殿、櫓、 櫓	櫓	門、櫓門	門、門、 櫓	櫓
	11 越前丸岡城図 （池田家文庫 岡山大学図書館所管）	天守台、門	櫓門、門 門、門	櫓、櫓門	櫓、櫓、	・	門、門	櫓門、櫓	・
	12 越前丸岡城図 （公益財団法人三康文化研究所付属 三康図書館所蔵）	天守台、門	櫓門、門 門、門	櫓、二重門	櫓、櫓、	櫓	門、門	二重門、 櫓	・
	13 越前丸岡城絵図 （225 本別 20-1・00-001） （国立国会図書館所蔵）	天守（3重）	・	二重門	櫓、櫓	・	二重門、 門	二重門	井戸
	14 越前丸岡之城図（松江歴史館所蔵）	天守（3重）	・	二重門	櫓、櫓	・	二重門、 門	二重門	井戸

### 3. 4 丸岡城跡周辺の関連する文化財

坂井市には、丸岡城が築城される前の拠点だったとされる豊原寺跡や、丸岡藩主であった本多家菩提寺の本光院、有馬家菩提寺の白道寺、高岳寺、台雲寺、丸岡藩主が庭園を楽しみに訪れたとされる久保田酒造や受法寺、そして称念寺など、丸岡城周辺には歴史的にも関連の深い文化財が多くある。

名称	所在	概要	写真
豊原寺跡	丸岡町豊原	<p>大宝2(702)年に泰澄大師が十一面観音を刻んで本尊とし、豊原八社権現をも祀る寺院として建立したといわれている。戦国時代に有力寺院として繁栄したが、越前が一向一揆勢に支配されると、豊原寺も一揆勢に拠点化された。このため、織田信長が越前一向一揆を制圧した際には豊原寺も焼き払われ、この地を与えられた柴田勝豊が丸岡城を築いている。</p> <p>明治2(1869)年の華蔵院の焼失や神仏分離令の影響もあり、白山神社を残して豊原寺は廃寺となった。現在は、華蔵院の跡や講堂跡(伝)および、白山神社(権現山)が残っている。</p>	
本光院	丸岡町巽町	<p>丸岡城初代藩主の本多成重の死後に、石城戸町白道寺に本多家の菩提寺として創建された。</p> <p>有馬家が丸岡藩の藩主になると、有馬家の菩提寺である白道寺が境内に移されたため、現在地に移され境内も縮小された。</p> <p>境内には本多重次、成重、重能、重昭の墓がある。</p>	
白道寺	丸岡町 石城戸町	<p>慶長18(1613)年、有馬直純が島原藩主のときの島原に有馬家菩提寺として建立した。元禄8(1695)年に有馬清純が丸岡に入封した際、白道寺も移転した。昭和23(1948)年の大地震で全壊し、本堂等は再建されている。</p> <p>境内には、有馬直純墓所および同室の日向御前の墓所がある。</p>	
高岳寺	丸岡町篠岡	<p>明暦元(1655)年に有馬康純が日向国延岡に創建した天台宗の寺院である。元禄8(1695)年に有馬家と共に丸岡に移り、歴代の城主の菩提寺となる。</p> <p>境内奥には、有馬家歴代墓所(市指定文化財)がある。墓所には、延岡藩15代直純、16代康純の墓とともに、丸岡藩初代清純、2代一準、3代孝純、4代允純、5代誉純、6代徳純、7代温純の有馬家9代の墓がある。</p>	
台雲寺	丸岡町 石城戸町	<p>有馬家菩提寺として、島原に開創されたと伝えられ、藩主と共に丸岡へ移ってきた、曹洞宗の寺院である。</p> <p>境内には市指定文化財(史跡)である蓑笠庵梨一墓が所在している。</p>	

名称	所在	概要	写真
國神神社	丸岡町 石城戸町	<p>梶子皇子の産湯を胎衣と共に「磨留故乎加」（現在の丸岡城のある場所）に埋めて、神明宮としたのが創建と伝えられる。</p> <p>その後、天正4（1576）年、柴田勝豊が丸岡城を築くにあたり、神社を現在地に遷座するとともに社領を寄進したという。以後、歴代城主の篤い崇敬の下、社殿の造営、修繕が行われた。</p> <p>境内には、丸岡藩最後の藩主有馬道純が寄進した、明治4（1871）年の刻銘がある灯籠が残る。</p>	
受法寺	丸岡町山久保	<p>明応5（1496）年現在地に移転し、後に丸岡城主本多家の祈願寺となった。</p> <p>開祖は加賀江沼郡勅使村願成寺（石川県加賀市）住職の弟の顕崇で、はじめ加越国境の市野々村（金津町）にあった。第5世寿法は、丸岡藩主本多重昭の深い帰依を受けた。</p> <p>本堂と鐘楼門は、享和3（1803）年に丸岡藩から造営木材伐採許可を得て建てられた。</p>	
久保田酒造	丸岡町山久保	<p>江戸時代創業の造り酒屋である。</p> <p>邸内に清流と美しい汀を作庭し、離れは、これを眺めるための瀟洒な二階縁をそなえる。</p>	
称念寺 (長崎城跡)	丸岡町長崎	<p>正応3（1290）年に伽藍が建立され、室町時代には時宗布教の中心となり長崎道場といわれた。また、太平記に「長崎城」として記載があり、南北朝時代には南朝方の武将新田義貞が拠点の一つとしていたと記されている。称念寺境内には、新田義貞公墓所（県指定の記念物）がある。</p>	
丸岡藩砲台跡	三国町梶	<p>幕末の嘉永5（1852）年に外国艦渡来に備えて築かれた。丸岡藩の砲台には今でも、土塁と5か所に大砲を備える砲眼が残っている。</p>	